

人社研ニューズレター

第 18 号

発行者

千葉大学大学院

人文社会科学研究所

phone/fax 043-290-3574

sshassist@shd.chiba-u.ac.jp



2007 (H19) 年度前半期学位授与式

目次

巻頭辞	1	専任教員業績	8
2007 (H19) 年度前半期学位授与式	2	社文研・人社研院生の研究業績	10
大学院教育改革支援プログラム	2	2007(H19)年度前半期全体研究会のお知らせ	10
「人文社会科学評価諮問会議」設置について	4	2008(H20)年度紀要刊行予定	10
新規科目担当者	4	大学院生研究室・貸与物品関連	11
人社研担当教員による出版物	5	大学院学務グループからのお知らせ	11
受賞	8		

若桑みどり先生のこと

人文社会科学研究科長 三宅明正

2007 年 10 月 3 日、突然若桑みどり先生（本学名誉教授）の訃報がとびこんできた。はじめはわが耳を疑った。あまりに急な出来事だったからである。

新聞報道によるとご自宅で 3 日未明になくなったとあるが、通夜の席でご子息の比織氏が話されたところでは、先生は 9 月 30 日以降主宰される研究所の業務と論文執筆のため書斎にこもられたままで、3 日にご家族が書斎に入ったときには、すでにお亡くなりになっていたとのことであった。

最後に手がけておられた論文は、人文社会科学研究科に提出を予定されていた、博士論文の草稿であった。「院生たちに千葉大でとにかく博論を書けとやってきたが、それがどれほど大変なことか、書いてみてはじめてわかった」ということばを先生が残されたことを聞いた際、怠惰な私ですら身が引き締まる思いであった。

実に多くのことを私は先生から教わったように思う。いくつか仕事も一緒にさせていた。先生が千葉大を停年になる前の時期に、私は大学院における先生の「拡大政策」に疑義を申し上げたことがあった。激論になったこともあった。しかしながら、意見の違いは別として、人びとの学びたいという意欲を大切に、ひとりひとりに親身に懇切丁寧に指導される先生のお姿には、私は敬意を新たにしました。

10 月 6 日告別式にむかう途中、弁護士の福島瑞穂氏と一緒にになった。福島氏はジェンダーを巡るバックラッシュに際して若桑先生にいろいろと相談されたという。「それにしても若桑先生が 71 歳だったとは、新聞の死亡記事で知ったのですが、本当に信じられません。もっとお若いと思っていたのに」と語る福島氏に、私は「不正や不当な行いに対しては、誰に対するものであっても、若桑先生はそれを徹底してたたきつぶすため全力を傾け、人々を鼓舞してこられたと思います。そうした行動を支える精神こそが、若さだったのではないのでしょうか」と答えた。

数日後、京都大学名誉教授の松尾尊兌先生からいただいた手紙（9 月刊行の『日本経済史』第 4 巻をお送りしたことへの返事）のなかに、以下の一節があった。「新聞により若桑さんのご逝去を知りました。一度もお会いしたことはありませんが、敬意を抱いてしました……」。

人びとを鼓舞し、敬意を集め続けた先生のご冥福を、いまはただお祈りするばかりである。



2007(H19)年度前半期学位授与式

2007 年 9 月 28 日（金）社会文化科学研究科科長室に於いて学位授与式（左写真）が行われ、5 名の方が社会文化科学研究科を修了し、学位を取得されました。

課程博士 5 名

氏名	論 題	取得学位
北原次郎太	アイヌの木幣と刻印が表す概念について	博士（学術）
符衛民	中国の財産制度—その変容と展望	博士（法学）
木村恵介	中国語における動補型複合動詞	博士（文学）
Fonseca Sakai Alberto Kiyoshi	日本における南米出身者のコミュニティ形成—ライフストーリーとメディア言説からみた「デカセギ」経験を中心として—	博士（学術）
荒巻英司	自生的福祉制度の生成可能性に関する論考—ゲーム論的アプローチ—	博士（経済学）

大学院教育改革支援プログラム

人文社会科学研究科と大学院教育改革支援プログラム

研究科長 三宅明正

2007 年、大学院教育改革支援プログラム（文部科学省/日本学術振興会）の募集に対し、私たち人文社会科学研究科は「実践的公共学実質化のための教育プログラム」で応募し、採択されました。

そこでは、これまでに人文社会科学研究科（ならびに前身の社会文化科学研究科）が行ってきた教育

を基礎にして、院生たちの自主性をさらにいっそう育みながら、ひろく社会と関連させて教育研究を発展させていくことが目指されています。

詳しくはホームページ (<http://www.shd.chiba-u.ac.jp/~ghss-spigse/>) をご覧いただきたいのですが、それは、実践的公共学応用プログラム、人文社会科学基盤的リサーチプログラム、留学生・社会人支援プログラム、国際化推進プログラムの四つのプログラムから構成され、前期課程五専攻、後期課程三専攻すべてがこれに取り組むというのが、私たちのプランです。

これらの実施を支援する目的で、人文社会科学研究科棟一階には大学院の「教育支援室」が設けられ、複数の特任教員が配置されました。また同じく一階に大学院の「留学生支援室」も設置されています。

こうしたプログラムへの取り組みをとおして、人文社会科学研究科に学びみなさんの研究・学業の飛躍的な発展が、期待されています。

「教育支援室」の概要

室長	三宅明正
副室長	柳澤悠・山田賢
取組教員	忽那敬三・小林正弥・ 水島治郎・石戸光・久保勇
特任教員	中村隆文・小野智香子

4つの教育プログラムの中で、院生の皆さんがそれぞれのリサーチ研究活動を進めたり、新たなカリキュラムを受講するために、さまざまなサポート活動をおこなっています。活動の詳細は、「実践的公共学実質化のための教育プログラム」ニューズレターをご参照ください。



留学生支援室での指導

新任特任教員の紹介

氏名
最終学歴
研究テーマ

主要業績（3点以内）

コメント

小野智香子

2002 年 千葉大学大学院社会文化科学研究科
単位取得退学、修士（文学）

言語学、イテリメン語（チュクチ・カムチャツ
カ諸語）

小野智香子『イテリメン語北部方言語彙・会
話例文集』大阪学院大学, 2003

鈴木麗璽・小野智香子・松村一登『フィール
ド言語学者のための Unicode ツール』大阪学院大
学, 2003

小野智香子「イテリメン語の動詞語幹の分類と
その派生法」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』第 13
号, 北海道大学大学院文学研究科, 2006, pp.53-73.

ロシア・カムチャツカ半島の少数言語であるイ
テリメン語について、フィールド調査に基づく記
述研究を行っています。フィールド調査をする際
には、現地の教育・研究機関や話者コミュニティ
と互いに協力し合うことが不可欠です。教育支
援室では大学院生のみなさんが「国際性」「学際
性」「実践性」を養う手助けをしていきたいと思
います。

新規開講科目についてのお知らせ

「人文社会科学リサーチ方法基礎論」

2007 年度後半期 水曜 2 限（終了）

2008 年度は前半期水曜 2 限に開講、博士後期

課程および社会文化科学研究科でも単位として認定されるようになる予定です。

「国際研究交流論 A」07年度後半期集中（終了）

以下は、これから開講される講義です。
履修登録者以外の方も是非ご参加ください。人社研・社文研の教員・大学院生の積極的な参加をお願いします。

「国際研究交流論 B」07年度後半期集中（2単位）

2008 年 2 月 13 日～15 日（午前 10 時 30 分～）

場所：総合研究棟 4 階 人社研研究科長室

講師：Mahdi Elmandjra 教授（モロッコ・ムハンマド 世大学、国際政治・アラブ社会論）

講義題目：Culture and Peace in the Era of Mega-Imperialism（メガ帝国主義の時代における文化と平和）

使用言語：英語

「国際研究交流論 C」07年度後半期集中（2単位）

2008 年 2 月 4 日～8 日（午前 10 時 30 分～）

場所：総合研究棟 4 階 共同研究室 2

但し、7 日のみ 2 階グラジュエイト・ラウンジ

講師：エドゥアルド・サルエ（Eduardo Sarue）氏（チリ・サンチャゴ市 キリスト教人文科学大学文化人類学教授）、ルイス・アスカラテ（Luis Azcarate）氏（社会調査コンサルタント、元コロ

ビア大統領府直属先住民問題局長）

講義題目：ラテンアメリカ先住民の現在 - 政策、健康、開発 -

使用言語：スペイン語

「国際研究交流論 B」08年度前半期集中（2単位）

2008 年 6 月開講予定

講師：Mark Selden 教授（ニューヨーク州立大学ビンガムトン校、東アジア社会論）

「国際研究交流論 C」08年度前半期集中（1単位）

2008 年 6 月開講予定

講師：Robyn Eckersley 教授（メルボルン大学、環境政治学・政治理論）

「人文社会科学評価諮問会議」設置について

人文社会科学研究科では、その教育・研究活動についてご意見をうかがい提言を行っていただくために、外部の方々からなる「人文社会科学評価諮問会議」設置を決めました。このたびその委員候補の方々が決まりました。以下のみなさんです。（50 音順、敬称略）

天野正子（社会学）	東京女学館大学学長
栗田健（労使関係論）	明治大学元総長
森正夫（中国史）	愛知県立大学元学長

新規科目担当者

平成 19 年度 10 月の新規科目担当者は以下の通りです。（専攻、教育研究分野順）

博士前期課程

○公共研究専攻

田島 正樹教授（共生社会基盤研究）

「言語分析論」「言語分析論演習」

○総合文化研究専攻

マイルズ・チルトン准教授（比較文化）

「英語圏文化論」「英語圏文化論演習」

鳥山 祐介准教授（比較文化）

「ロシア文化論」「ロシア文化論演習」

内山 直樹准教授（人間行動）

「史的価値論」「史的価値論演習」

松香 敏彦准教授（人間行動）

「認知情報解析学」「認知情報解析学演習」

人社研担当教員による出版物

石田憲編『膨張する帝国 拡散する帝国——第二次大戦に向かう日英とアジア』

東京大学出版会、257頁、2007年4月。



二〇世紀の帝国は、何故または如何に膨張したのか。本書は、先発帝国イギリスと後発帝国日本をめぐって、どのような膨張の論理と行動が展

開されていたのか、を多角的に分析した。そして、太平洋戦争勃発以前に焦点を絞り、第二次世界大戦が日英両帝国を軸に引き起こされていった背景を、これら帝国本国と外部世界との相互影響関係の中で考察している。本書の特徴としては、これまで一国史の領域に留まりがちであったアジアをめぐる帝国の諸問題を様々な視角から捉え直そうと試みたものである。日英両帝国の膨張と拡散は、世界大に政治・経済・イデオロギー的摩擦を作り出すと同時に、被支配地域における種々の分野に帝国の論理を浸透させ、同時に帝国自体の新たな構造変動を生ぜしめていた。このため、本書は従来ばらばらに行なわれがちであった異なる分野の分析を複合的に組み合わせることで、全体の構造を動的に捉えるよう試みている。

(本研究科教授 石田憲)

佐藤博信『安房妙本寺日我一代記』思文閣出版、四六版、203頁、2007年10月、¥3,000+税。



この度上梓した『安房妙本寺日我一代記』は、日蓮宗寺院の安房妙本寺(千葉県安房郡鋸南町吉

浜)の住職で戦国時代に活躍した日我の一代記を平易に記述したものである。これまでも日蓮宗僧侶の伝記には、宗祖日蓮・日親(「鍋かぶり日親」)・日奥(「不施不授」)などがあるが、いずれも恋慕渴仰の余り実像と虚像の狭間に描かれてきたものが多い。本書では、その点を鑑みて、残存する古文書と記録を中心にその生涯を正確に綴ることに心した。本書を通じて富士門流・安房妙本寺・日我というこれまで余り知られてこなかった門流・寺院・僧侶が少しでも理解されることを願っている。日我は、戦乱・飢饉のなかで多くの書物を著し後世に残した。その代表作が古辞書「いろは字」であった。そこで、日我は「一字に千思を尽くす、一語に万慮を廻らす」という値千金の言葉を残した。座右の銘としたい。

(本研究科教授 佐藤博信)

久保田正人『ことばは壊れない—失語症の言語学』
 (「開拓社言語・文化選書4」開拓社、2007年10月。



本書は、神経内科の医師を含む失語症の研究者や言語聴覚士などを主な読者に想定した、失語症の言語分析を主題とする本です。この本の主張はタイトルにあるとおりで、失語症患者の言語知識は、「失語症」という病名から受ける印象とはちがって、壊れたり失われたりすることはない、というものです。壊れたり失われたりすることがないから、一部の書物や新聞の社説のタイトルのように、「(リハビリテーションによって)ことばを取り戻す」などという状態を想定するのも事実の誤認であることになります。このような不正確な言い方がなかなか改まらないところに、この分野のむずかしさともどかしさがあります。

失語症は、大脳皮質の特定部位が脳血管障害などによって器質的に損傷を受ける(つまり当該部位の神経細胞が死ぬ)という基礎疾患の後遺症として現れるもので、損傷を受けた部位と損傷の程度によってその現れ方がさまざまに変化する症候群です。もともと aphasia という用語は 19 世紀中頃に a-phatos ("speechless/without language") というギリシャ語から創作されたもので、「失語症」という日本語訳も、ここに由来します。

失語症の研究に関わるようになったのは、20 年近く前に東京都老人総合研究所に非常勤研究員として招かれたときからのことでした。当時、世界の 14 ヶ国語の母国語話者で、ある種類の失語症を患っている患者のデータを、同じフォーマットで記録、分析し、相互に比較し合おうという壮大なプロジェクトが進んでいました。日本からは老人研の笹沼澄子、筑波大の神尾昭雄、そして久保田正人の 3 名が参加しました。この研究成果は数年後にオランダの John Benjamins から総ページ数 1,985 ページという 3 巻本の大著として出版されました。収録されている論文はその言語分析において精緻を極めたものだったので、失語症の専門家でも、読んで理解できる方がそれほど多くなかったようです。

このたびの本は、このときの研究成果のエッセンスにその後の進展を加えて、脳や言語に関心のある一般の読者でも読めるように整えたものです。

(本研究科教授 久保田正人)

小林正弥・千葉真編著『平和憲法と公共哲学』晃洋書房、298頁、2007年9月、¥3,465 (税込)。

この秋、小林正弥、千葉真編著『平和憲法と公共哲学』(晃洋書房、2007 年)が出版されました。本書は、国際基督教大学 COE プログラム「『平和・安全・共生』研究教育の形成と展開」における「平和憲法を考える研究会」主催の 4 回の講演

会ないし報告会(2003 年から 2005 年)さらにこの COE プログラムと千葉大学 COE プログラム「持続可能な福祉社会に向けた公共研究拠点」とが連携して 2005 年 12 月に行われたシンポジウム「平和憲法と公共哲学」に基づいています。

「改憲」が叫ばれる中において、わが国の「平和憲法」の意義を公共哲学の観点を導入して学術的に検討しました。憲法学を専門とする深瀬忠一先



生や君島東彦先生をはじめ、平和学の武者小路公秀先生、教育学の藤田英典先生、国際法の功刀達朗先生、政治学の加藤節先生、杉田敦先生、寺島俊穂先生、公共哲学の山脇直司先生、千葉眞先生といった多彩な論者に寄稿していただき、学際的で新しい洞察を多く含む論集となりました。

平和憲法の意義について多様な議論を提示し

ているとともに、憲法、平和思想、教育立法などについて公共哲学の観点からも新しい議論が提示されています。もともと公共哲学の関心がある論者だけではなく、他の多くの論者も公共哲学ないし公共性との関係を意識して議論を展開している点は重要です。この点も、私たちのCOEにとって大きな成果とすることができるでしょう。私自身は、「ディープ・ピースと友愛世界主義—南原平和と公共哲学の再編成」という論文を執筆しました。これは、「友愛公共哲学」の方向性を示すと共に、「友愛平和主義」という考え方を提起することによって、平和公共哲学を本格的に発展させるための起点となると考えています。これらによって、平和憲法をこれからも生かしさらに発展させるための有意義な展望が、憲法論と公共哲学の双方において切り開かれることを期待しています。

（本研究科教授 小林正弥）

（本研究科特別研究員 小松優香）

石原俊『近代日本と小笠原諸島——移動民の島々と帝国』平凡社、2007年9月、A5版、総533頁。



京都大学大学院文学研究科に提出し学位を授与された博士論文に、大幅な加筆修正を加えた著書である。

小笠原諸島は、近代日本国家が帝国として立ち上げられていく過程で、「北海道開拓」や「琉球処分」と並行していち早く占領の対象となり、アジア太平洋戦争において日本帝国の前線基地とされ、戦後は四半世紀近くにわたってアメリカ合衆国の統治下に置かれることとなった群島である。

小笠原諸島はもともと無人島であったが、1830年前後に捕鯨業の隆盛を背景として北太平洋が世界市場の前線に組み込まれていく中で、捕鯨船の船乗りなどとして海と島々を転々としながら生きていた移動民が、世界各地から集まっていた。しかし 1870 年代に、日本帝国が小笠原諸島に対する排他的な法の導入に成功すると、雑多なルーツを持つかれら移動民の子孫たちは、日本帝国の臣民＝国民として帰化させられていく。

本書は、かれら移動民とその子孫たち（日本帝国の下で「帰化人」と呼ばれた人びと）が、「群島と海」を拠点としつつ、官吏や軍人といった主

権のエージェントたちとの（非対称な）相互作用の中で、帝国の力とどのようにわたりあいながら生き抜いてきたのかを、広範な文献資料とフィールドワークによるインタビューデータに基づいて、実証的に描き出そうとした。

全体の構成は以下の通り。

はじめに——移動民の島々から

第 1 章 移動民の占領経験——「カナカ系の人、ケテさん」のライフヒストリーから

第 2 章 移動民の島々と帝国——本書の理論的視座

第 3 章 移動民の島々の生成と発展——小笠原諸島をめぐる実践・法・暴力（1826-1860 年代）

第 4 章 水兵たちと島人たち、あるいは法と暴力の系譜学——沖縄島におけるペリー艦隊の衝撃を焦点に（1853-1854）

第 5 章 移動民と文明国のはざまから——ジョン万次郎と船乗りの島々（1841-1864）

第 6 章 海賊から帝国へ——占領への道程（1869-1886）

第 7 章 主権的な法と越境する生——「帰化人」をめぐる自律的な交通（1877-1920 年代）

第 8 章 自由の帝国の臨界——小笠原諸島と「南洋」の系譜学（1853-1910）

第 9 章 生き延びるためのたたかい——「帰化人」をめぐる動員とテロル（1877-1945）

第 10 章 終わらない占領経験——小笠原諸島の〈戦後〉をめぐる（1945-）

おわりに——擬似大陸意識を超えて

本書の成果はさしあたり、「戦後」の日本社会で忘れられてきたもうひとつの「民族問題」「先住民問題」を明らかにしたことにあるのかもしれない。だが本書の研究の意義はむしろ、19 世紀から現在まで 200 年近くの小笠原諸島を焦点とする定点観測を通して、世界各地から集まってきた移動民（の子孫）が生き抜いてきた状況を、世界市場の変容や主権国家（帝国）の動向の中に位置づけながら、グローバルな水準で考察した点にある。

また本書の作業は、帝国の「縁」——拙著の表現を用いるなら法の〈波打ち際〉——における法・暴力と人びとの生のせめぎあいを捉えていくことを通して、東アジア・北西太平洋に関しては従来圧倒的に「陸」の側から問われてきたポストコロニアルな経験を、「群島と海」の側から問い直そうとした試みでもある。[千葉大学学長裁量経費の助成による刊行]

（本研究科助教 石原俊）

人社研専任教員業績

2007年7月～12月

著書・論文

小林正弥「ディープ・ピースと友愛世界主義—南原平和と公共哲学の再編成」千葉眞、小林正弥編著『平和憲法と公共哲学』晃洋書房、2007 年 9 月。

小林正弥「地球公共的霊性の哲学的展望—『文明の衝突』を超えるために」日本平和学会編『スピリチュアリティと平和』早稲田大学出版部、2007 年 11 月。

Haruka Yanagisawa, “The Growth of Rural Industries in Tamilnadu and Their Domestic Markets, 1900-1950”, in Noboru Karashima, E. Annamalai and S. Rajaram eds., *Contribution of Tamil Culture to the Twenty First Century: Proceeding of the Eighth International Conference-Seminar of Tamil Studies, January 1995*, International Association of Tamil Research, Chennai, 2005 (実際の刊行は 2007 年 8 月)。

柳澤悠・栗田禎子・寺尾忠能「国際シンポジウム『アジア・中東における「伝統」・環境・公共性』」『アジア経済』Vol. 48 No. 8、2007 年 8 月。

石原俊『近代日本と小笠原諸島——移動民の島々と帝国』平凡社、2007 年 9 月。

石原俊「忘れられた＜植民地＞——帝国日本と小笠原諸島」『言語文化研究』（特集：グローバリゼーションと植民地主義）立命館大学国際言語文化研究所、2007 年 9 月。

その他

小林正弥「あとがき」千葉眞、小林正弥編著『平和憲法と公共哲学』晃洋書房、2007 年 9 月。

小林正弥「巻頭言 特集『文明論・環境倫理・公共哲学』」『公共哲学』第 4 巻第 2 号、2007 年

小林正弥「総括コメント」同上。

小林正弥「公共性」「公共政策の倫理」の項『応用倫理学事典』丸善、2007 年 12 月。

メディア・報道

小林正弥（本研究科教授）

「自民大敗の風景—07参院選ちば(下)—」『朝日新聞』千葉版 2007 年 8 月 2 日

廣井良典（本研究科教授）

「現代の格差—社会保障による再分配強めよ—」『朝日新聞』2007 年 7 月 9 日



「負担・給付の選択 国民に問え」『朝日新聞』2007 年 12 月 21 日



石原俊（本研究科助教）

岩崎 稔・本橋哲也・石原 俊「座談会：2007 年の思想界をふりかえる」『週刊読書人』2007 年 12 月 28 日



**社文研・人社研博士後期課程
大学院生の研究業績
2007年7月～12月**

張嵐「中国残留孤児の帰国動機 - 語られ方をめぐって - 」『日本オーラル・ヒストリー研究』第 3 号、2007 年 9 月。

藤方博之「堀田氏家臣団における御目曲尺（おめがね）養子について」『千葉史学』51、2007 年 11 月。

韓葵花「発展段階における韓国自動車部門の企業間関係」『千葉大学人文社会科学研究』第 15 号、2007 年 9 月

Kousuke Kaita, "The Historical Formation of English Auxiliary *Ought to* with special reference to Late OE and Early ME", *Studies on Humanities and Social Sciences of Chiba University* (『千葉大学人文社会科学研究』) vol.15, 2007.9.

**2007 (H19) 年度後半期
全体研究会のお知らせ**

2008 (H20) 年 3 月 10 日 (月) ~ 11 日 (火) の 2 日間にわたって開催されます。プログラムの公表は 2 月上旬に予定されておりますので、人社研・社文研 H P でご覧下さい。

人社研 H P

http://www.shd.chiba-u.ac.jp/~ghss/activity_general.html

社文研 H P

http://www.shd.chiba-u.ac.jp/b_zentai.html

2008 (H20) 年度紀要刊行予定

『人文社会科学研究 (旧社会文化科学研究)』第 16 号が 3 月中旬に刊行されます。

『人文社会科学研究』第 17 号について

募集 2008 年 6 月 2 日 (月)

～ 6 月 13 日 (金) 午後 5 時

原稿締切 2008 年 7 月 1 日 (火) 午後 5 時

発行 2008 年 9 月中旬

『投稿規定』『スタイルガイド』など詳細は H P をご覧下さい。

人社研 H P

<http://www.shd.chiba-u.ac.jp/~ghss/students.html>

社文研 H P

大学院生研究室・貸与物品関連

2008 年 3 月に修了、退学、休学される方で、本研究科から院生研究室的固定席、ロッカーの鍵（博士後期課程のみ）、机の鍵（博士前期課程のみ）、書架、P C、校費コピーカードの貸与を受けている方は、**3月31日（月）までに当該物品を指定の場所に返却、または私物を撤去してください。**今回から、利用希望者多数の状況に鑑み例年より少し時期が早くなっていますが、新しい利用者の方のためにご協力いただけますようお願いいたします。（鍵その他の返却を 3 月 31 日までに完了した博士後期課程進学予定者に限り、固定席の私物の撤去期限を 4 月 7 日（月）としますので、返却の際に窓口にお知らせください。）

返却窓口

ロッカーの鍵、机の鍵、校費コピーカード、
P C（博士後期課程）
.....**大学院学務グループ窓口**

P C（博士前期課程）
.....貸与を受けた窓口

尚、**博士後期課程**の休学者のうち、学位請求論文を執筆中の方に限り、主任指導教員からの特例申請（様式は H P からダウンロード）があれば、P C の継続利用が認められます。該当者は必ず申請をお願いします。

2008 年度から復学される**博士後期課程**の大学院生の方で固定席、物品等の貸与を希望される方は**2008年3月3日～3月25日**に申請書を後期共同研究室（＝旧助手室）にご提出ください。

様式はこちらです。

<http://www.shd.chiba-u.ac.jp/%7Eghss/students.html>

大学院学務グループからのお知らせ

大学院学務グループ窓口前の掲示のうち特に重要なものは統合メールシステムの「通知版」にも掲載することにしました。学外からもアクセスできますのでご利用ください。

統合メール（ログイン）

https://cuacmsrv.chiba-u.jp/am_bin/am_main.cgi/login

ログイン後、「通知版」のタブを選択し、「大学院生通知版」をクリックしてください。